

テーマ	「多様性」を支える協働的な学級集団づくり
発表者 (所属)	企画者：上條大志（小田原市教育委員会） 司会者：上條大志（小田原市教育委員会） 話題提供者：片岡寛仁（小田原市立酒匂小学校） 水間清香（大分市立明治小学校） 鈴木遼輔（筑波大学附属小学校） 指定討論者：阿部利彦（星槎大学大学院教育実践研究科）
<p>【企画趣旨】</p> <p>急速な情報化や技術革新は、我々の社会生活を大きく変化させている。例えば、スマートフォンやソーシャルメディアの普及により、世界中の人々との交流が容易になり、多様な他者とながれるようになった。また、多くの仕事がオンラインで行われ、多様な働き方をするようにもなった。多様性は、個人に多くの選択肢や自由、最適をもたらすと同時に、社会に対して、さまざまな利益をもたらすことになった。</p> <p>我々は、社会の中で生きている。社会の中で自己実現していく。そこで出会う課題に対しては、それを乗り越えようと試行錯誤していく。一人で乗り越えられるものではなく、多様な他者との協働によって乗り越えていくのだ。むしろ協働的な関係性が築かれることにより、多様性が認められていくのかもしれない。</p> <p>学校教育においては、さまざまな学習活動を通して、多様性を支える協働的な学級集団づくりやそのよさを体験していく。</p> <p>本シンポジウムでは、多様性を支える協働的な学級集団づくりに取り組んでいる3名の先生方に、それぞれの視点から具体的実践について話題提供していただく。協働的な学級集団づくりに大切なものは何か、そのことが多様性をどう支えているのかについて深めていきたい。</p> <p>【話題提供】</p> <p>話題提供者 1 「しくじり教師の一提言 「これからの教師の出番や役割」とは」 小田原市立酒匂小学校 片岡 寛仁</p> <p>クラスの中に、「私は勉強が、超スーパーウルトラ激烈特盛大っ嫌いです。面白くないし、周りの人が分かっている自分だけ分からない時、不安になる、焦る、辛い。」と「しんどさ」を心の中に抱えている子はいないだろうか。</p> <p>そんな子たちが1年後、「自分が分からない時、友達がヒントを出してくれるから、置いていかれないんだ！って「安心」できました。私がどんな事を言ってもみんな一緒に考えてくれたし、時には私の「何で？」の一言がすごい発見につながることもありました。「わからない」「できない」ということに焦る事なく授業を楽しむ</p>	

めました。」こんな風に言えるようになったらどうだろうか。一体この学級集団で何が起こったのだろうか。

学校教育を取り巻く状況が変化する中、これからの学級集団づくりにおいて教師の果たすべき「役割や出番」も考え直さなければいけない。私は役割や出番をたくさんしくじってきた。「しくじる」たびに子どもたちからの温かい「支導」をうけ、UD学会・職場の仲間から刺激と学びをいただいていた。その学びをもとに上述した学級集団を目指した「教師の出番や役割」について皆様と共に学び合いたい。

話題提供者 2 「高学年の協働的な学級集団づくり」

大分市立明治小学校 水間 清香

高学年の学級経営の難しさは、低学年のそれとはまた違うものである。一人ひとりを丁寧に見取り、対話や指導をすることだけを心がけていても、なかなか上手くいくものではない。特に、困難な児童指導の事案件数が多く、落ち着きがない最高学年の学級を経営していくことは、簡単なことではない。

4月には最高学年として、緊張感をもって過ごしていても、1学期後半から「ルールを守れない」「人が話すときに被せて話す」「自習ができない」などの行動が目立つようになる。

そのような時には、「安心・安全な学級をつくる」ことを改めて確認し「言葉遣い」「周りの人のことを考えて行動すること」などを中心に指導を繰り返していく。一人ひとりに「学級のいいところ」「学級で困っていること」を書いてもらい、全員の意見を共有し、そこから共通点を探し、みんなで改善していくことを確認していく。

また、特別支援学級在籍の児童への関わりが不適切な児童がいる場合には、児童の話聞きつつ、特別支援学級の担任に当該児童の苦手なことやこれまでに成長してきたこと、頑張っていることなどを話してもらうなどの手立てを講じていく。こうしたことを通して、学級集団としての落ち着きを少しずつ取り戻していく。

話題提供では、高学年の学級集団づくりについて、児童たちが多様な仲間とどのように協働していくのか、担任教師はどのような学級集団づくりをしていくのかなどについて紹介する。

話題提供者 3 「とりえを生かす学級集団づくり」

筑波大学附属小学校 鈴木 遼輔

学級は、多種多様な個の集まりである。当然、その個(子)ごとに育った環境が違うので、その子ごとの考え方のもととなる背景も異なってくる。

しかし、社会としての学級は、指導という名のもと、その背景を考慮せずに、集団としての価値観を強要してしまうことが多い。算数なら算数科としての思考判断。社会科なら、社会科的なものの見方。これらのもとに、その子独自の発想や見方を評価していく。こうして、その子が本来持っている「とりえ」は潰れていくのである。

ハワード・ガードナー氏は、マルチピザにて、8つの知能を提唱した。私は、この考えのもと、子どもそれぞれが得意としている力を「とりえ」としてとらえ、教科・領域によって切り分けられるのではなく、それぞれの「とりえ」が生かされるように、授業をデザインし、みとり(評価)を行っている。

一人ひとりが、その子のとりえを生かすことにより、「自分は大切にされているのだ」という実感を深めていく。そして、それは他者への関係にもおよぶこととなり、「誰ひとり取り残さない学級」になっていくと考えている。

そのための手法の第一義は、みとりである。今回は、そのみとりについて、詳しくお話をさせていただきたいと思う。

キーワード：多様性、協働的な学び、学級経営、学級づくり